

令和4年度・令和5年度
川崎市社会教育委員会議
幸市民館専門部会 報告書

「笑顔と多様な夢を育む学び舎を目指して」
～人・つながり・地域づくりを進める幸市民館～

令和6年3月
川崎市社会教育委員会議幸市民館専門部会

はじめに

令和4年度・5年度の幸市民館専門部会では、以下の審議テーマと副題とを決め検討した。

- ・審議テーマ 「笑顔と多様な夢を育む学び舎を目指して」
- ・副 題 ～人・つながり・地域づくりを進める幸市民館～

笑顔は、子どもも大人も心配や不安のない心情や状況の象徴である。多様な夢は、地域の理想や計画から、個人の希望や尊重までの広い意味を持つ。それらが、学びの場である幸市民館に溢れ、人のつながりを増して、地域がより住みよくなることを目指すとした。

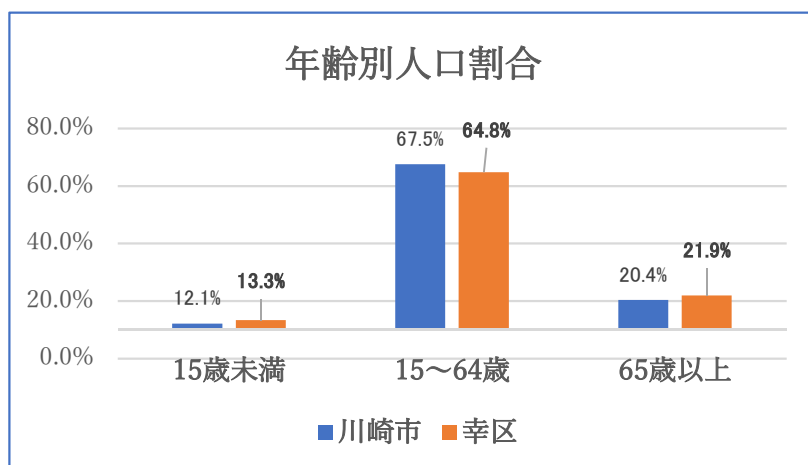
検討は、以下のような手順で行った。

- ・地域が抱える差し迫った課題を探る。
- ・市民館の現在の取り組み状況を知る。
- ・市民館に期待する今後の方向性を探る。

1. 地域が抱える差し迫った課題

(1) 幸区人口等の現状

令和2年（2020年）国勢調査の人口の推移では、2008年をピークに全国的に人口は減少しているが川崎市は1,539,081人と5年間で4.3%の増加率である。幸区においては、総数 171,188人で5年間 増加数 10,298人、6.4%の増加率である。



令和4年度の川崎市統計データブック（令和3年10月1日調査）によると、幸区の15歳未満人口割合は、13.3%、15歳～64歳は64.8%、65歳以上は21.9%となっている。全市との比較は左の表のようになる。幸区では全市より、15歳未満が

1.2%、65歳以上が1.5%増となる。これから見ると幸区は15歳未満・65歳以上の人口が多いことが分かる。

幸区の夜間人口（常住人口）は、171,119人に対して昼間人口は165,154人で昼夜間人口比率は96.5%となる。全市では、夜間人口1,538,262人に対し昼間人口1,285,285人で比率は83.6%で通勤・通学で市外へ流出する人が多いことが分かる。

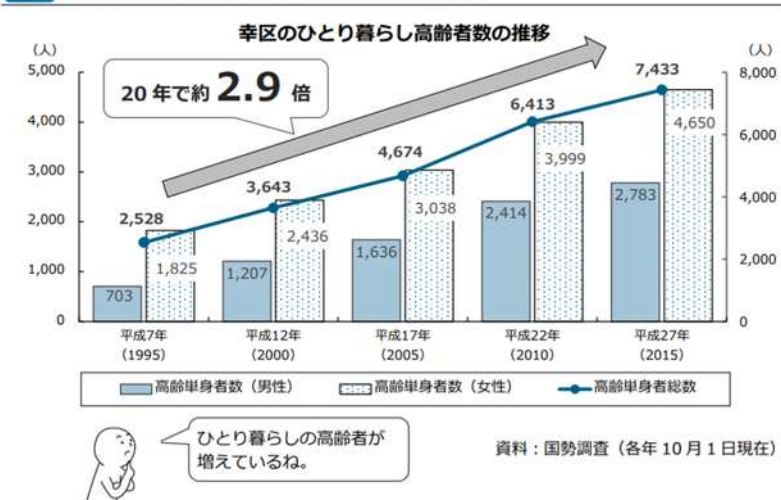
令和5年（2023年）5月に公開された人口の動向でも、幸区は、人口増になっている。人口数値としては、表にはないが最小の中原区に次ぐ少ない人口密度となっている。

	人口増減	自然増減	社会増減
全 体	1691	-2092	3783
川崎区	-535	-1338	803
幸 区	318	-209	527
中原区	1005	551	454
高津区	-598	-142	-456
宮前区	434	-320	754
多摩区	1088	-114	1202
麻生区	-21	-520	499

また、ひとり暮らしの高齢者が増加していることが分かる（第6期幸区地域福祉計画より）。

■ 高齢者の暮らし

5 ひとり暮らし高齢者は男女とも増加傾向



わが国の今後の人口減少予測を踏まえて、川崎市の人口動態から幸区の人口構成比の特質を浮かび上がらせ、川崎市の中での幸区の特質を多少とも窺い知ることができる。

幸区は、小中学生以下の幼児を含む子どもの数と高齢期の大人の数が全市から見て多く、通勤・通学による昼間に市外に流出する人口が全市の中でもとても少ない。また、川崎市の中で今後も比較的人口の増加傾向が期待でき、人口密度も市内では上位にあることを示している。これらの点から、働き盛りの生産労働人口に比べて、学齢期の子ども世代と定年退職を迎えた高齢者世代が多く住んでいるのが幸区の特徴ということになる。

もっとも、幸区内でも今後も新興住宅街の集まる地区と平屋の多い地区との間でも多少の人口構成の違いがうかがわれることであろう。日吉分館を利用する周辺に住む区民層と幸市民館を利用する区民層の違いに注目して調べてみるのも面白いかもしれない。日吉分館の周辺住民層は新興住宅地が多いことから、働き盛りの世代が多く利用者の傾向に影響を与えてはいないだろうか。

（２）アンケートにみる市民館の現状と期待

令和元（2019）年度 かわさき市民アンケートでは、「市民館を知っている」は 63.4% で、「利用したことがある」は 42.2%。「利用した市民館」では、幸市民館は 14.2% で 7 区の市民館（分館を除く）の中では最下位であった。

市民館の利用目的では、「ホールでの発表会やギャラリーの展示等をみるため」40.5% 「講座やイベント、サークルなどの活動に参加するため」22.2%。

また、市民館を利用したことの無い理由では、「どのようなことができる施設かわからない」42.9%、「そもそも関心がない」26.3%、「参加したい講座等がない」5.7%。

さらに利用してみたい市民館では、「自宅に近い（もしくは行きやすい）場所にある」29.2%、「居心地がよく飲食などができ、居場所としてつかえる」19.3%、「市民のライフスタイルや生活課題に対応した細かいサービスや講座がある」13.3%、「自分の能力を活かした社会参加や交流のきっかけができる」7%、「友人や仲間ができる」5%。

なお、市民の意識として、人づき合いの煩わしさを感じる市民と、孤独解消のために人とのつながりを求める市民も存在する。

以上のことから、ロケーションをハンデキャップとしない工夫、より効果的な宣伝や、魅力を感じてもらえる学び等の内容をより工夫することに伸びしろのあることが分かる。

上記のように最近の市民アンケートの結果から、市民館の現状と課題を分析した。まず、「利用した市民館」（分館を除く）においては 14.2% であり、全市内で最下位という結果となっている。市民館の立地条件（ロケーション）が利用者が伸びない原因の一つにあることは以前より専門部会内でも取り上げられてきている。幸区における高齢者数の増加傾向を考慮に入れると事態は深刻といえるかもしれない。市民館に来て利用する高齢者区民の交通手段が確保できていない現状も一因と思われる。

これまで以上に市民館は、利用できていない区民の近くにまで出ていき、そうした区民に事業を提供することを考えていかなければならないだろう。例えば、オンライン事業を通じた高齢者区民の市民館利用の促進なども最近は進められている。

また、「市民館を利用したことがない」理由で最も多いのが「どのようなことができる施設かわからない」で 42.9% に及んでいる。施設利用案内情報の積極的な拡充策と周知徹底が期待されるが、従来の紙媒体による広報活動だけでは限界がある。若年層の世代には SNS 等の電子媒体を活用した広報が必要となるかもしれないが、他方で、高齢者層の世代は一樣ではなく、年齢が高くなればなるほど「世代」で括られるニーズがあるわけではないとされ、一人ひとりの個性が強まっていくとされる。数年前の幸市民館での生涯学習交流集会で発言した区民は 90 歳を超えてパズルを解くグループ活動に参加していて、高齢にもかかわらず、健康で元気を訴えていたことが思い出される。

さらに、「利用してみたい市民館」では、「自宅に近い（もしくは行きやすい）場所にある」という回答率が最も多いことから、遠出することに抵抗感が見られ、利用のしやすさが求

められているようだが、物理的距離だけでなく、市民館と区民との間の心理的距離が遠いということも勘案してみる必要があるかもしれない。市民館の提供する事業に魅力を出すのは容易なことではなく、時代の流行を取り入れたり社会動向に配慮して事業を提供したりするなどの創意工夫も必要であるといえる。

一方、たくさんの参加者を集めることが事業の成功と評価されがちではあるが、少数の利用者であっても市民館の事業に長く関心を寄せる区民をいかに確保することができるかを考えていかなければならないだろう。

市民館との関係づくりという点では、子どもの頃から市民館の利用を促す事業展開など長期的な目で見ること必要だろう。

（３）アンケートにみる幸区の現状と期待

幸区高校生アンケート（令和２年度）では、幸区の不満に感じるところは「治安や風紀」が 33.1%で最も多く、「教育・文化環境」7.2%、「地域の人間関係、つながり」4.6%、「子育て環境」3.3%となっている。

10年後、『どのような「まち」に住みたいか』では、「災害・防災に関して」は、それぞれ 56.2%、「子どもを育てやすいまち」25.9%、「障害の有無にかかわらず、誰もが自分らしく暮らせるまち」18.5%、「社会的に支援が必要な方（高齢者や障がい者など）を支えるまち」13.3%、「外国人市民が暮らしやすいまち」6.3%、「身近な地域の課題を地域で解決する自治意識が高いまち」3.7%である。

ボランティア活動に興味がある分野では、「ごみ、清掃、資源などのリサイクル活動」26.6%が最も高く、「子育てに関する活動」22.2%、「国際交流に関する活動」9.6%、「障がい者のための活動」8.1%となっている。

以上のことから、学びの内容に関するヒントが伺える。

若い世代の関心を市民館や事業にいかに集めるかという点で、幸区高校生アンケートの結果は参考になるかもしれない。幸区の不満に感じるところでは、「治安や風紀」に対する回答率が最も多い。また、10年後の住みたいまちとして挙げられた回答率の高いものは、「災害・防災に関して」が 50%を超えている。若い世代ながら犯罪や災害に対する危機意識が高いといえるのかもしれないが、不測の事態への対応に困難さを感じるという点では若い世代も変わらなくなっているのかもしれない。

将来に対する漠然とした不安や心配は誰もが感じることから、高齢期に得られる安定した社会保障制度も変貌を迎え、将来の生活に対して不安を抱え込む社会の中で、人生の長い期間にわたるリスク管理を求める意識が若い世代に芽生えてきているのではないだろうか。重化学工業地帯の一角を占めた川崎市では、工場に勤める労働者が多く、その一部を外国人に依存してきた土地柄である点で、当時から貧困・格差が見られたが、急速に進む都市化の下で不平等な面が見えなくなっているところがあるように思われる。特に、

川崎駅周辺は都市開発がなされ、商店の並びとオフィス街が整然としてきている一方、市街地から外れると高層マンションが立ち並ぶ地区もあれば、昔ながらの集合住宅地も幸区内に混在している。日々開発が進む中で暮らしている若い世代が敏感に感じ取る不安や心配に对应していく取り組みが求められているのではないか。この点に関しては、若い世代の就業意欲を促進する教育機会の拡充とともに、社会と接点を持ち始めた世代に対し、政治・社会参加の機会をどう育むかという点とを合わせて考えていくべき課題と言えるかもしれない。

2. 市民館の現在の取り組み状況

～幸市民館・日吉分館の学級・講座・事業の現状と分析～

(1) 青少年対象の事業等

市民館が取り組む青少年対象の事業には、以下のようなものがある。

- ・参加者が次年度に企画者になって運営にも参画する日吉分館の「日吉あそびっ子クラブ」
- ・インターンシップ等、中学生・高校生が企画者になる幸市民館の「謎走中！」

青少年層を一人ひとりの固有の興味・関心に基づいて社会に参加させるという、社会参加の機会を市民館が青少年に向けて提供することは極めて大切になってきている。

現代は、中高生世代は学習や部活動に励む時期で、社会参加の機会が兄弟姉妹、家族の減少など家庭環境の変化もあり、社会参加の機会が以前に比べて少なくなっている。地域の青少年団体への加入率の低下や室内遊びが増える中で、一人でメディア機器を利用して過ごす時間も多くなっている。

また、青少年一人ひとりの学校外での過ごし方はさまざまであるが、個人と社会のつながり方を支援する人々が減少し、その人々の果たす役割が衰退してきている。

青少年の社会参加を育む機会の提供は、区民のボランティアスタッフの協力なくして成り立たない。市民館職員と一緒に活動できる区民の協力を得ながら、青少年の社会参加の機会の提供を引き出さなくてはならない。

青少年の育成に当たっては、家庭・学校・地域・行政が一体となって取り組む必要がある。まずは市民館の認知度アップのために「参加しておもしろかった」という思い出をつくれるような事業を家庭・学校・地域・行政の大人たちが一体となって作っていくことが必要である。

市民館の利用を足掛かりに、さまざまな地域活動に目を向け、より自分にあった事業に活動の場を移すなど、視野が広がるきっかけづくりになるようにしていくとよい。

実際に「謎走中！」開催後のアンケート結果から、参加して楽しかった事業には、参画者になって同事業に関わろうとする傾向がみられた。また、「日吉あそびっ子クラブ」では小学生を対象に事業を行っているが、事業を終了した児童・生徒がボランティアや市民館事業

に興味を持ち、自ら運営に参加を申し出てくれることもある。

これらのように市民館の利用を足掛かりに、さまざまな地域活動に目を向け、より自分にあった事業に活動の場を移すなど、視野が広がるきっかけづくりになるようにしていくとよい。

（２）市民館利用団体との連携事業

市民館の利用団体との連携事業には、次のようなものがある。

- ・市民館コミュニティ推進事業
- ・市民館ジャックなど幸区地域教育会議との連携事業
- ・幸区文化協会との連携事業
- ・幸区PTA協議会との連携事業
- ・幸サークル連絡会との連携事業、など

かつて市民館を利用している団体数の半分ほどは市民館の主催事業から生まれた団体であるともいわれたように、市民館の運営に協力する利用団体が多かったと聞いたことがある。市民館の主催事業から生まれ育った利用団体らが市民館の事業に協力することは自然なことであったともいえるが、利用団体側が協力して得られるメリットが見えなくなっていないだろうか。市民館側でも利用団体に頼ろうとする姿勢があるのかどうかである。

一方、市民館コミュニティ推進事業では、社会教育人材ネットワークの構築・展開による事業が実施され、令和５年度は、開催回数 106 回、提案団体・個人数も 24、提案種類は 32 種類（３月末現在）と、地域人材による学びの場が広がっている。これらの人材を市民自主学級・市民自主企画事業の提案や様々な市民館事業の企画委員や市民講師が活躍できるよう、市民館職員が社会教育人材ネットワークのコーディネーターとして、地域における学び・実践を推進していく必要があると考える。

市民館が定期的に利用団体との意見交換や交流の機会を持ち、利用団体の声や意見を受け止めようとする気持ちがあるならば、利用団体が市民館の事業に協力を寄せるメリットを感じられるかもしれない。市民館も利用団体も共に社会教育の振興に貢献していることが意識できたら新しい連携事業が生まれるのではないかな。

（３）企業等との連携事業

市民館が取り組む企業との連携事業等には、以下のようなものがある。

- ・明治安田生命保険相互会社による「そうぞく講座」（高齢者セミナー）
- ・明治安田生命保険相互会社による「食育講座」「大人のぬり絵」（家庭・地域教育学級）
- ・株式会社テレビ朝日による「メディアとのつきあいかた」（現代的課題学習事業）

企業等との連携事業は、利用団体との連携事業と並んで、今後は市民館が主催する事業

の一角を占めていくことになるかもしれない。企業とタイアップして企業から出資される財源によって事業が運営されるということは、事業の企画アイデアが得られる点とともに、事業予算の確保に苦勞する行政サイドからも歓迎されるものになるのではないか。一方、企業等にとっても何らかのメリットが得られなければ継続した連携は難しい。いかに地域貢献をしていることを参加者に伝えていくか、宣伝ととられない範囲で企業努力を伝えていき、絶えず連携事業の成果を共に確認していくことが求められる。

また企業のノウハウを活用し、講座を充実させることにより、先述の「市民館とともに活動をしていく区民の育成」にも好影響を与えていく活動になると思われる。

3. 市民館に期待する今後の方向性

(1) 課題と解決のために

ここまで、以下のようなことを見てきた。

- ・幸区の人口増、年代別の人口割合、昼間人口から、15歳未満・65歳以上の市民が昼間人口とも言え、その世代への学級・講座の提供が必要であるのではないか。
- ・市民アンケートからも、既に講座やイベント、サークル活動への参加が目的とあるが、「市民のライフスタイルや生活課題に対応した細かいサービスや講座がある」「自分の能力を活かした社会参加や交流のきっかけができる」「友人や仲間ができる」場としての市民館を利用したいと望んでいる。
- ・高校生アンケートで10年後のまちとして、「子ども」「高齢者」「障がい者」「外国人市民」「地域の課題解決」ができるまちを希望している。

つまり、人生100年といわれる時代にあって、子ども・若者・中高年・高齢者のあらゆる世代がつながるような学級・講座・事業を実施することにより、互いに刺激し合う元気なまちづくりに寄与するのではないだろうか。

人口構成から見える幸区の現状を踏まえると、比較的に昼夜の人口の異動が少なく、15歳未満の区民と65歳以上の区民の数が全市の中で多くみられる点では、青少年向け事業と高齢者向け事業の可能性がうかがえる。

また、市民アンケートを踏まえると、市民の多様なライフスタイルや生活課題に対応したり、個人の持つ能力を活かしたりする機会や場面を欲していることが挙げられ、区民の個別多彩なニーズに応えるきめ細かなサービスが期待されているわけであるが、従来の世代別や性別で一括りされる層ごとの事業提供のあり方の見直しが求められているとも考えられるのである。

長寿化している現代においては、年齢を重ねるほどに、年の取り方や生き方や考え方に多様性が見られる時代となっている。他方、低年齢層の青少年においても、少人数学級実現の期待に見られるように、子ども一人ひとりの発達の個人差や子どもの才能・個性に応

じた教育のあり方が問われている。従来の社会教育で尊重された子ども同士という集団形成の視点とともに、子どもの個別の意見に耳を傾け相談に応じる大人世代の存在との関係をいかに育むかという地域社会のあり方を考えることが新たな今後の検討課題となる。これまでの家庭に依存した子育てから、地域コミュニティと共に行う子育てという視点が重要である。

（２）市民館事業での課題

上記のように幸区の現状と課題を考えてみた場合、市民館事業での課題として浮上する点は、１つには、高齢者向け事業における高齢期の発達の個人差に応じた事業の提供である。高齢期の年齢の重ね方は、その人の生き方を反映しており、年相応の老け方もあれば年齢に見合わず若々しく心身を保つ年の取り方もある。その点で、高齢期の課題に応じた事業の企画においてもステレオタイプな高齢者像に基づく学習機会の提供にとどまらず、既存の枠組みに収まらず、何にでも挑戦できる学習機会の提供に取り組むことであろう。

２つには、青少年向け事業における子ども同士という集団形成の視点を尊重しながらも、それにとどまらず、有意義な大人との関係を築く視点を取り入れた事業の提供も今後は求められるのではないか。子ども期の発達のあり方も個人差があり、子どもの個性的発達を支援する環境づくりが、学校とは異なって市民館に期待できるのである。

３つには、幸区ならではの点もあるが、他区より比較的多い高齢者と青少年が共に活動し、交流する機会を得られるようにすることである。世代ごとの価値観や考えを異にしているため、慎重な配慮の下で、個別の出会いや交流の機会を育むことにならざるを得ないだろう。

（３）幸市民館・日吉分館のあり方や今後取り組む事業

幸市民館・日吉分館それぞれの市民館の事業の特徴の一つは、職員と区民との垣根が高いということなのだろうか。特に「課題」という捉え方をするわけではないが、それが施設の物理的距離もさることながら、施設管理者と施設利用者、ひいては市民館と区民との間に心理的距離となって現れてはいないだろうか。２～３年で異動する市職員と生涯にわたって利用する幸区民との違いでもある。自治体職員の役割は公平に施設の設備や事業を提供することに重きが置かれており、施設利用者の区民は設備をもっと自由に使いたい・事業をもっと多彩に享受できたらと思っているところがある。この市民館職員と区民の思いのすれ違いが両者の意識を隔てることになってはいないだろうか。施設の設備や事業を挟んで職員と区民が対立することもかつてはあったのかもしれない。

そこで、こうした区民との連携を阻む壁を乗り越えるために、今後取り組む事業の一つに挙げたいのは、施設職員と区民利用者をつなぐ「中間支援者」の育成と配置であると考え。職員と区民の間を隔てる垣根や障壁を取り除くには、職員と区民の中間に立ち、両者を媒介する中間スタッフの存在が欠かせないと思われる。たとえば、図書館に置かれる

コンシェルジュ、学校の授業を手伝うアシスタント、大学に置かれるチューター、博物館に置かれる展示解説員等々、ときに無給の施設ボランティアであり、ときに有給の学習支援員である。公民館でも生涯学習支援員等の専門員を置く自治体もあるが多くはない。会計年度任用職員とも違う有給無給を問わず中間支援スタッフの養成と配置について市民館の事業を通して取り組む時期に来ているのではないかと思われる。全ての市民の学ぶ権利を損なうことがないことを含め、やがて始まる指定管理者制度導入の際の仕様書に取り入れるよう検討してもらいたい。

本専門部会におけるこれまでの議論を踏まえ、市民館が今後取り組む事業等に関連することがらを次に列挙する。

① 市民館で学んだ市民がその成果を発表、次の事業につなげる工夫

「自分の能力を活かした社会参加や交流のきっかけができる」の声等から考える。

② 様々な団体・個人の力と協働で課題解決につなげる誰もが参画できる事業

「地域の課題解決」ができる事業として、世代間交流や大学等高等教育機関との連携、企業との連携、高校生のボランティア活動としての連携。市民・市民団体との協働事業も挙げられる。

③ 指定管理者制度導入との教育委員会の方針について

市民へのサービス提供・市民協働事業などを低下させず、これまでの事業を見直し良き事業は継続実施し、実施しなければならない事業については、明確で詳細な仕様書を作成することを強く要望したい。特に、本専門部会の審議テーマである「笑顔と多様な夢を育む学び舎をめざして ～人・つながり・地域づくりを進める幸市民館」の必要条件を挙げること。

- ・ 公共機関で実施すべき事業として社会参加・共生推進学習の「障がい者社会参加活動」、「識字学習活動」がある。また、市民自治基礎学習である「男女平等推進学習」、「平和・人権尊重学習」、併せて学習権保障のための「保育活動」の維持・継続。
- ・ 市民の学習・市民活動を活性化するための「市民自主企画事業・市民自主学級」、学びの成果を活かす機会の事業。
- ・ 様々な団体・個人の力と協働で課題解決につなげる事業。

④ 「第 11 期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理」～全ての人のウェル

ビーイングを実現する、共に学び支え合う生涯学習・社会教育に向けて～ よりウェルビーイングの実現、社会的包摂の実現を図る役割

- ・ 学び合う、教え合う、助け合う、励まし合うといった相互性に支えられながら、一人ひとりが主体的・持続的に学んでいくという生涯学習は、多様なウェルビーイングを実現するような場を自らも他者との関係性の中で共に形成していくうえで、重要なものである。
- ・ 共生社会の実現を目指す上で、社会参画に制約のある高齢者、障がい者、女性、外国

人、貧困の状況にある子ども、孤立・孤独の状況にある人たちを含め、誰一人として取り残すことのない社会包摂の実現にむけ、関係機関との連携や ICT の利用により、必要な生涯学習・社会教育の機会を提供すること。

- ⑤「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について（答申）（中教審第 212 号）」における、今後の社会教育施設の在り方、今後の社会教育施設に求められる役割、公民館、を考慮した活動

- ・学習の成果を地域課題解決のための実際の活動につなげていくための地域の防災拠点としての役割
- ・「社会に開かれた教育課程」の実現にむけた学校との連携
- ・「地域運営組織」の活動基盤となる役割
- ・外国人が地域に参画していくための学びの場

（４）市民館事業に求めること

- ① 課題解決のための市民館事業は、地域づくりに活かせることが必要である。

そのために以下のことを行うことが必要と思われる。

- ・若い世代（中高生）に向けた事業の拡大（SNS の積極利用促進、デジタル環境整備）
- ・若い世代（中高生）の憩いの場となるような空間の設置、および中間支援者の配置
- ・市民自主事業の応募規約における制限の見直し、もしくは撤廃、および中間支援者と一緒に継続的な活動に向けた事業
- ・職員の増員またはボランティアの中間支援者の設置

- ② 市民館と市民が一緒にできることを考える。

- ・市民館ができること
出前学習会等、アウトリーチ的な事業の展開
- ・地域ができること
地区別に「幸市民館を考える会」の開催

- ③ 市民館の学びを作り出す学習の中に、これまでのライフステージ学習に加えて、普遍的な課題である不登校・孤立・孤独（ひとり暮らし）などを対象とした内容の学習の取り入れ

例えば、支援要員の養成講座の開設や、地域での居場所について学習・支援するプログラムと研修等。

- ④ SDGs や川崎市ブランドメッセージ「Colors, Future! いろいろって、未来。」実現に向けた学習を取り入れる。

- ⑤ 市民が気軽に使えるフリースペースを設置する。

これについては、「あたらしい幸市民館・図書館を考えるワークショップ」において検討されており、その意見を十分に反映させることが求められる。

【引用・参考文献】

- 令和 2 年国勢調査
- 令和 4 年版 川崎市統計データブック
- 令和元(2019)年度 かわさき市民アンケート
- 第 6 期幸区地域福祉計画
- 令和 2 年度 幸区高校生アンケート調査報告書
- 文部科学省、第 11 期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理
～全ての人のウェルビーイングを実現する、
共に学び支え合う生涯学習・社会教育に向けて～、令和 4 年 8 月
- 文部科学省、人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について（答申）（中教審第 212 号）、平成 30 年 12 月

令和 4・5 年度 社会教育委員会議 幸市民館専門部会委員

◎は会長、○は副会長

	氏 名	所 属	部会開催年月日
◎	浦山 利博	幸区 P T A 協議会 会長 （令和 4 年度） 川崎市 PTA 連絡協議会 会長(令和 5 年度)	①令和 4 年 6 月 26 日 ②令和 4 年 9 月 12 日
○	松井 節子	幸区文化協会 評議員	③令和 4 年 12 月 21 日
	平井 育子	西御幸小学校 校長（令和 4 年度）	④令和 5 年 2 月 5 日
	柴田 薫	西御幸小学校 校長（令和 5 年度）	⑤令和 5 年 6 月 29 日
	梅原 七重	幸サークル連絡会 会計	⑥令和 5 年 9 月 25 日
	大塚 謙一郎	幸区地域教育会議 議長	⑦令和 5 年 12 月 11 日
	夏井 美幸	公募委員	⑧令和 6 年 2 月 18 日
	片岡 了	明治大学 兼任講師	
	小泉 愉孝	鹿島田幼稚園 園長	